

②6 板倉源太郎 Ⅲ

板倉源太郎は、大勢の視察者に『板倉農場誌』を作って、対応するようにした。農場は一般の農家に比べて特別変わったことはない。と述べ、農場経営の方針を四点挙げている。

- 一 大面積の経営
- 二 肥料の自給と地力の増進
- 三 経営の複式化
- 四 技術の研究

当時の農家一戸当たりの耕作面積は、一町未満であったが、板倉農場は、裏作を含めて六町余りと極めて広かった。米や麦づくりを中心にした五反や八反程度の農業では成り立たない。と大規模経営の有利さを述べている。開墾地では肥料の問題は深刻だった。藁灰や堆肥を入れたり紫雲英を蒔いて鋤き込む努力をしても、なお金肥が必要だった。そこで肥料の自給化から養豚を始めた。厩肥を作った堆肥とした。地力をつけるためでもあった。また養豚は増収にもなった。稲作だけでなく、複式化を進めることで、

労働力が配分でき、そして現金収入にも片寄りがなくなり、しかも総収入も増えた。たとえ不作にあっても、互いに補い合って収入が安定するので、経営の複式化を強調した。一九二九年（昭和四年）の板倉農場の経営は次のようであった。

夏 作	水 稻	3 町 2 反歩
	梨	長十郎 2 反 5 畝歩 廿世紀 2 反歩
	西 瓜	3 反 5 畝歩
	後作大根、白菜 又は（間作里芋）	
冬 作 （田裏作）	柿	1 反 7 畝歩
	小麦大麦	8 反歩位
	紫雲英	5 反歩乃至 1 町歩
	内採種 5、6 反	
畑 作	甘藍（キャベツ）	1 反歩
	独活（ウド）	1 反 2 畝歩
家 畜	豚	50 頭
	鶏	50 羽
	牛	1 頭

板倉農場誌 昭和 5 年版
豚：毎年 50 乃至 100 頭売却
鶏：常時更新

さらに、技術の研究では、何事にも注意と努力をすることの必要性を指摘している。最後に、この四つの項目は互いに関連し合っている。ので、共に推し進めなければ、有利な農業経営はできないと強調している。

農場は家族だけで働いて、やり通すのが特徴であった。一九二九年（昭和四年）、老齢な源太郎（当時六十一歳）に長男夫婦の家族に男の使用人一人の四人が働いた。人件費の節約にはなるが、一生懸命働かねばならなかった。休むのは正月、盆、祭礼の五日程の精励ぶりであった。牛も同様、田の草取りや運搬、糶摺りや精米・精麦にも使い、年間百二十日くらい働かせている。



板倉農場の豚舎（現在の安城市今池町）
スローガン「痩せた荒地も耕しゃ肥える。人と家畜のとも稼ぎ。板倉農場」

多くの農民が、山崎延吉の講演を聞き、指導を受けた。しかし、源太郎のような農場を実現させたのは彼を置いていなかった。成功を左右したのは彼の人柄であった。

彼はただ働くだけではなかった。没落した旧主人岡本八右衛門一家へは、毎年飯米を贈り続けたり、物乞いに来た乞食には決まって食べ物を与えたりする心遣いもしていた。

源太郎を知る池浦町の高齢者の話として、「口数の少ない、これと決めたことはためらわずに実行する人、決断力のある人、実行力のある人で、いつわりのない人だった」と『池浦の歴史』で言い伝えられている。

源太郎は、一九三八年（昭和十三年）一月一九日、七十歳で病没した。

文 中村幸雄